

# わだい しんじん さっか きくち かん せま 話題の新人作家・菊池寛に迫る！



## きくちかん新聞

第3号



ちちかえ げき み かんどう きくち かん  
「父帰る」の劇を見て感動する菊池寛

みなさんは、「父帰る」というお話を知っているだろうか。  
家族を捨てて家を出た父親が、数年ぶりに帰ってくる。家族は父親の帰りを喜ぶが、長男だけは父親をむかえ入れようとしない。というお話だ。作者は、菊池寛（きくちかん）という、話題の新人作家である。  
菊池寛は、「父帰る」が初めて上演されたとき、いっしょに見ていた友人の芥川龍之介、久米正雄とともに、大泣きしたという。そして、「父帰る」によって、自分の名前は未来まで残るだろう、と語ったそう。



菊池寛が人気作家となるまでに、様々な苦労があった。  
学生のころから作品を書いていた菊池寛。大学を卒業した後、時事新報社という新聞社に入社する。新聞記者をしながら、作品を書き続けたが、仕事が大変で、つらいことも多かった。  
とくに、尊敬する作家・夏目漱石が死んだとき、友人たちが悲しんでいるなかで取材をするのは、心苦しかったそう。それでも菊池寛はまじめに仕事をし、作品を書き続けた。  
そして大正7年6月、『中央公論』に「無名作家の日記」を発表する。『中央公論』はとても有名な雑誌で、ここで作品を発表することは、一流作家の仲間入りを意味していた。



にんき さっか きくち かん  
人気作家となり、モテモテの菊池寛

その後、菊池寛は時事新報社をやめて、作家の仕事に集中し、「真珠夫人」という作品を発表する。美しいヒロイン瑠璃子の愛と復讐のストーリーは大人気となり、あつというまに流行作家となった。  
超・有名人となった菊池寛。本もいっぱい売れて、お金持ちになったという。しかし、菊池寛の作家人生はここがゴールではない。なんと自分のための雑誌を作ろうと計画しているらしいが…次号へつづく！

「きくちかん新聞」は2ヶ月ごとに発行し、菊池寛の一生をお伝えします。Webでも見ることができます。

